

除草剤が農業生産性、特に除草労力の軽減化に寄与している成果はめざましいものがある。すなわち、使用面積は年々増加し、昭和41年度には水田300万ha、畑地60万haに達している。また、使用農家戸数は総農家戸数の75%に及び、これが使用によって節約される労力は数千人とみられている。最も過重な除草作業は最も軽作業化され、さらに機械化農法を可能にし、農業の近代化に著しい貢献をもたらしている。

しかし、現在の除草剤の中にはその作用特性によっては作物への安全性や除草効力などに万全とはいわれず、また魚貝類に対する毒性にも問題が残されているため、なお今後の改良開発にまつべき点が少なくない。

一方、生育調節剤は、現在あまり見るべきも

のがないが、この開発が最近問題となっている。作物の生産安定、収量性の向上の面から極めて重要な課題で、有効物質の早急な開発が求められている。このような観点から当省においてもケミカルコントロール研究推進協議会を設け、積極的に研究を進めている。

以上のように、除草剤、生育調節剤は今後の農業発展のうえに大きな役割を果たすもので、そのためには関係者各位の一層の努力にまつところが多い。

このときに、日本植物調節剤研究協会が、この部門における行政、技術面の動向や今後の方向などを中心にしたPR誌「植調」を発刊することを決められたことは極めて有意義なことで、その成果を心から期待するものである。

発 刊 に 寄 せ て

東京大学農学部教授 戸 莉 義 次

終戦後間もない昭和21年、私は農林省農事試験場の作物部長であった。日本は工業発展を禁止され、農業国としての存在が許されるという傾向にあったので、農業研究の部門を拡げるのは割に楽であった。部員の意見を聞いて部の編成や拡充を考えているうちに、将来の研究分野として除草技術の発達をはかるべきだとの意見が、若い人から出され、私は深く考えさせられた。的を射た発言だと感心し、色々と検討した結果、雑草防除研究室を設ける決心をし、みんなにはかって讃成を得た。

ところが、雑草は作物ではない。それを作物部で取りあげるのは名目上どうもおかしいというわけで、その処置に困った。当時鴻巣の農事

試験場には作物部のほかに技術部と農具部があり、技術部長はさきの農業技術研究所長の今井さんだった。雑草防除研究室は作物部ではおかしいが技術部所属とすれば格好がいいので、今井さんを説得して、研究室員を作物部から選出することを条件に承知してもらった。

新しい分野を開拓するためにはち密な計画と大胆な行動力を必要とする。室長の人選には苦心したが荒井正雄君をマークして懇請した。なかなか承知しなかったが、遂に承諾されたのが雑草研究室の創まりである。前に山崎守正さんの塩素酸カリ、抗毒性の種類間差異といった着想はあったが、ともかく白紙から出発しようというので、内外の文献調査から始めた。ちょう

どその頃、東大野口教授は2.4-Dの研究に着手、兵庫県農事試験場井上技師の2.4-D効果の発表があり、これらを総合し、除草剤に関して水も漏らさぬ研究組織が農林省研究部を中心にできあがり、着々効果をあげた。山梨県農事試験場由井技師のP.C.Pの効果確認に及んで、

水田除草は正に画期的となり、畑作、園芸、林業と拡がり、ついに研究事務を農林省から離して植物生育調節剤研究協会に委ねることとした。その「植調」が研究連絡のため機関紙を出すまでに生長した。慶賀に堪えぬとともに感慨を禁じ得ない。発展を祈念する。

発 刊 に 寄 せ て

このたび、日本植物調節剤研究協会が4才の誕生を迎えるにあたりまして、協会が発足当初から企図され、また関係者一同からも強く期待されていた機関誌「植調」が発刊されることになりましたことは、植調協会が生れるとき、いささか助産のお手伝いの労を果し得た者として、まことに慶賀にたえないところであり、心からお祝い申し上げます。

日本の農業があらゆる視野と角度から論議的となっている折から、生産資材としての農薬がいよいよ重要視されていることは申すまでもありませんが、特に“省力農業”達成のためには病害虫防除の合理的効果とともに除草、生育調整の実効発揮によって省力の目的が達せられなければなりません。

農薬工業会会長 深 見 利 一

2～3年来急速に再燃している米の増産運動が、本年はさらに拡大して展開されようとしております。“増産”と同時に“省力”と“品質向上”が大きな目標として打ち出され、全国的に各県それぞれの合言葉のもとに新しい米作り運動が繰り広げられており、“省力”に役立つ農薬の意義が一層高まっているのであります。

こうした背景にたって、本誌が除草剤・生育調節剤について行政的・技術的動向の指針として期待されるものはまことに大きいのであります。直接編集に携はれる各位のご努力は当然のことですが、関係各位の絶大な声援と協力によって、課せられた使命を充分に発揮し本誌が斯界の最高権威として内外から活用されるよう切望してお喜びの言葉といたします。

除 草 剤 の 今 後 の 方 向 (1)

農林省農事試験場 荒 井 正 雄

わが国農業発展の鍵

わが国の農業技術は、近年著しい進歩をとげつつあるが、特筆に価するものの一つに雑草防

除技術がある。この雑草防除技術の飛躍的な進歩は、戦後における雑草の生態的研究成果を基